



アイヌ民族の精神を体現した 知里幸恵（一九〇三―二二）

世界に多数存在する先住民族

約二〇万年前にアフリカ大陸に登場した現在の人類の祖先ホモ・サピエンスはグレート・ジャージーニーと名付けられた移動に出發し、南極大陸以外の大陸に分散していきましました。その一部は氷結したベーリング海峡を横断し、一万年前に南米大陸の南端に到達しました。このヤーガンと名付けられた人々は一九世紀に進出してきた西洋の人々に殺戮されたりして減少し、その最後の一人が二〇二二年に死亡し、消滅してしまいました。

このように人類が世界に浸透して行く過程で、未開の土地に最初に到達した人々は先住民族と名付けられ、一九九二年十二月に国際連合の「先住民族についての作業部会」により「外部の地域から異質の文化をもつ異質の人々が到来し、地元住民を支配し圧倒して人口を減少させ、非支配的な立場や植民地的状況にしてしまった時代に、現在の居住地域に生活していた人々の現存する子孫」と定義されています。

現在も世界の九〇カ国以上に五〇〇〇以上の先住民族が生活し、その人数は合計すると三億七〇〇〇万人以上、すなわち地球の人口の五％程度と推定されています。筆者は世界の三〇以上の地域に生活する先住民族を訪問し、それらの人々の歴史と文化を紹介し、現在の社会が再考すべきことを検討するテレビジョン番組を制作した経験があります。その一連の番組の最後に紹介したのが日本に現在も生活するアイヌ民族です。

日本の先住民族アイヌ

世界の先住民族の大半が文字による記録のない文化を維持していたため、その歴史には不明な部分がありますが、アイヌ民族も同様でした。江戸時代以前には蝦夷地と

名付けられていた北海道から樺太方面と千島列島方面の広大な地域に生活していましたが、明治時代になって日本政府は北方からの脅威に対抗する目的もあり、明治二（一八六九）年に蝦夷地を正式に日本の国土にし、名称も北海道としました。

そして明治三二（一八九九）年に日本政府は「北海道旧土人保護法」という法律を制定します。アイヌ民族は広大な土地を利用して狩猟採集で生活していましたが、新規に本土から入植してくる人々は農業牧畜を生業にするため一定の土地を私有する必要があるしました。その入植してくる人々が増加すると、土地問題が発生するようになり、アイヌの人々に土地を分譲し農業を生業にするように強制するのが法律の目的でした。

素晴らしい能力の才女

このような時代の転換が開始した直後の明治三六（一九〇三）年に室蘭本線の登別駅と豊浦駅の間にある場所で、土地の有力な家系の一員である知里高吉と金成ナミの長女として誕生したのが今回紹介する知里幸恵です。夫妻は子供時代から知合いの仲でした。しかし、明治二二（一八八九）年にアイヌ民族の生業であった原野での狩猟も河川での漁業も禁止され、必死で不慣れな農業をする生活に転向しました。

そのため幸恵は祖母になるモナシノウクとともにアイヌ民族の伝統ある言葉、食事、衣類で生活することになりますが、これがアイヌ民族の精神を伝承する『アイヌ神謡集』の執筆の背景になります。しかし、幸恵が六歳になった明治四二（一九〇九）年に、母親の姉になる伯母の金成マツが聖公会伝道師として生活する旭川にモナシノウクとともに移住し、以後、登別に帰還することはありませんでした（図1）。



図1 知里幸恵と金成マツ

マツが奉職する聖公会教会は旭川を中心から八キロメートル郊外にあるアイヌコタン（集落）にあり、翌年、幸恵は市内にある上川第三尋常小学校に入学しました。

成績優秀のため、一九一六年には上川第三尋常高等小学校高等科、翌年には創設されたばかりの旭川区立女子職業学校に四番という素晴らしい成績で入学します。数学、図画、作文は一番、音楽も裁縫も優秀でしたが、いつも優秀なアイヌという評価に傷付いていました。

金田一京助との出会い

その旭川で、幸恵の仕事がアイヌ文化を世間に認知させる契機となる素晴らしい出会いが発生しました。イギリスの宣教師でアイヌ文化を研究し、アイヌ民族の救済にも尽力したジョン・バチエラーの紹介で、アイヌ文化を研究していた金田一京助が大正七（一九一八）年夏に旭川にマツを訪問してきたのです。マツ、モナシノウク、幸恵が歓迎し、モナシノウクがユカラを演奏し、話題は神話や伝説にまで発展していきましました。

次々と提供される豊富な話題に金田一は熱中し、気付いたときには最終列車が出発してしまっていました。そこで隣家のアイヌ学校の校長の自宅に宿泊してもらおうと依頼したところ、夫人が病気で対応できないとのことで、金田一はマツの住居に宿泊することになりました。一張りしかない蚊帳に金田一の布団を用意し、三人の女性は一睡もせずに炉辺で一晩を過ごしたことが知り、金田一は落涙したという逸話も伝承されています。

出発間際になって、幸恵が「先生は貴重な時間と金銭を消費してユカラのために尽力しておられますが、ユカラはそれほど価値があるものでしょうか」と質問しました。金田一は「世界に自慢できる叙事詩であり、ギリシャやローマの文化に匹敵するユカラを維持しているアイヌ民族は劣等民族ではなく、貴重なアイヌの言葉は人類の宝物です。自分は財産すべてを費消してもいいという覚悟で研究しています」と返答しました。

幸恵は涙目で「私達はアイヌのことは何事も恥ずかしいことばかりと思っています。いま、先生の言葉で目覚めました。これを機会に祖先が伝承してきたユカラの研究に邁進したいと思います」と返答したといわれます。これは金田一が何度も回顧している対話ですが、幸恵の人生の方向が決定した瞬間でもありました。それから四年後に、幸恵が上京して金田一の自宅に寄宿するまで、文通が継続します。

後世に遺贈された『アイヌ神謡集』

しかし、この幸恵が自分の役割に目覚めた時期に、未来に暗雲が登場してきました。金田一と出会った翌年は旭川国立女子職業学校の最終学年でしたが、幸恵は体調不順

で休学状態になり、ようやく卒業して医師に診断してもらったところ、病状は慢性気管支炎で、心臓は僧帽弁狭窄症であると宣言されたのです。金田一は幸恵を東京の学校に入学させようと期待していましたが、その体調では困難ということになってしまいました。

そこで金田一は後世への記録として、どのような内容でも自由に記載するようにと一九二〇年に三冊の大学ノートを幸恵に送付しました。感激した幸恵はほとぼる気持ちで、十分な暖房もない部屋で次々とアイヌの叙事詩であるカムイユカラを記録し、翌年に最初の一冊を東京の金田一に発送しました。それまで金田一は自身でもカムイユカラを記録していましたが、はるかに正確で立派な内容が記載されており、感動します。

それ以後も幸恵から送付されてきた内容の重要さを認識した金田一は原稿を『アイヌ又舊(旧)話集』という書名で発刊する段取りをすると同時に幸恵を上京させるように手配します。明確な事情は不明ですが、地元での結婚の予定が順調ではないこともあり、幸恵は大正一一(一九二二)年五月に室蘭から青森に海路で移動、青森から鈍行列車で二日をかけて上野に移動し、五月一三日に出迎えの金田一とともに金田一宅に到着しました(図2)。



図2 金田一邸での知里幸恵
(1922)

金田一にも夫人の静江や言語学者となる長男の春彦などにも親切にされますが、慣れた生活で八月には胃痛と心臓発作になり寝込んでしまいます。医師の診断では、やはり「僧帽弁狭窄症」と診断され、残酷なことに結婚不可とも判断されてしまいました。それでも『アイヌ神謡集』の出版の工程は順調に進行し、校正作業を完了しますが、その翌日に容態が急変し、帰郷することなく東京に移動して一二九日に死亡しました。

知里幸恵の遺言

まだ当時の日本ではアイヌ民族への偏見は色濃く存在しており、『女学世界』という雑誌に幸恵が登場するときに、編集者が幸恵をアイヌであることを明示しないよう

配慮しようとしたところ、それは侮辱にもなる余計な配慮だとして、日記に「私はアイヌであったことを喜ぶ。私がかもしかシムサ（和人）であつたら湿（うるお）ひの無い人間であつたかも知れない。しかし私は涙を知っている。それは感謝すべき事である」と記述しています。

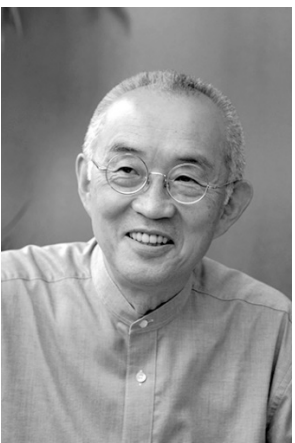
このようにアイヌ民族の出身としての明確な自覚というよりは使命を意識していた幸恵が伝達したかったアイヌの世界は『アイヌ神謡集』に展開されている多数の伝承からも理解できます。彼女があまりにも短命な人生と交換に執筆した一〇〇〇字強の序文は感動する文章です。その一部を抜粋して、一九年という短命でありながら、神業のような仕事を遂行して逝去した女性の遺言ともいふべき心情を最後に紹介します。

その昔この広い北海道は、私たちの先祖の自由の天地でありました。天真爛漫な稚児のように、美しい大自然に抱擁されてのんびりと楽しく生活していた彼等は、真に自然の寵児、何という幸福な人だちであつたでしょう。（中略）

太古ながらの自然の姿も何時の間にか影薄れて、野辺に山辺に嬉々として暮らしていた多くの民の行方も亦いずこ。（中略）

時は絶えず流れる、世は限りなく進展してゆく。激しい競争場裡に敗残の醜をさらしている今の私たちの中からも、いつかは、二人三人でも強いものが出て来たら、進み行く世と歩を並べる日も、やがては来ましょう。

（後略）



つきお よしお 1942年名古屋生まれ。1965年東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授などを経て東京大学名誉教授。2002-03年総務省総務審議官。これまでコンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策などを研究。全国各地でカヌーとクロスカントリーをしながら、知床半島塾、羊蹄山麓塾、釧路湿原塾、白馬仰山塾、宮川清流塾、瀬戸内海塾などを主催し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。主要著書に『日本百年の転換戦略』（講談社）、『縮小文明の展望』（東京大学出版会）、『地球共生』（講談社）、『地球の救い方』、『水の話』（遊行社）、『100年先を読む』（モラロジー研究

所)、『先住民族の叡智』(遊行社)、『誰も言わなかった!本当は怖いビッグデータとサイバー戦争のカラクリ』(アスコム)、『日本が世界地図から消滅しないための戦略』(致知出版社)、『幸福実感社会への転進』(モラロジー研究所)、『転換日本地域創成の展望』(東京大学出版会)、最新刊「AIに使われる人 AIを使いこなす人」(モラロジー道德教育財団)など。モルゲンWEBの連載「清々しき人々」とパーサー誌の連載「凜々たる人生―志を貫いた先人の姿―」からの再編集版として、『清々しき人々』、『凜々たる人生』、『爽快なる人生』(遊行社)など。